

書道・創百人一首

特231

553

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 1 2 3 4 5

始



特 231  
553



書道  
創百人一首





1 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ吾が衣手は露に濡れつつ

實つた秋の田の畔に、假の小屋を立てて番をしてみると、ほんの間に合はせに葺いた苫の屋根も粗い故に、その隙間から露が漏つて、わしの袖も濡れ續ける。——と、農民の辛苦をお察しになり、その身の上になつてお詠みになつた御製。

天智天智

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

吾が衣手は露に濡れつつ

天智天智







山邊赤人

老翁如う所  
なれも白妙乃所  
しる祿るし此記た降つ

4 田子の浦に打出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

田子の浦に出て、より仰いで見れば、大空高く聳えた富士の嶺に、雪が真白に降つてゐる——と、極めて雄大な調子で、雄大な感じを飾り氣なく正直に詠んだ歌。

5 奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき

秋は何事につけても物悲しいものであるが、とりわけ山の奥深く散りしいた紅葉を踏み分けながら鳴く、あの鹿の聲を聞く時が、一番物悲しい——感傷の秋を詠んだ詩人らしい歌。

猿丸大夫

おとこ女こもふの今をさるる秋は  
そなく思ふ乃こもふ今をさるる秋は  
秋をさるる今をさるる秋は



中御三の持

鶴乃わさせつ橋置  
まよれしるすれを  
夜ふるまよふか

6 かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

かうして宮中の宿直(とのゐ)をしてゐて、御階の上いつの間にか降つたらしい霜の眞白なのを見てゐると、ああもう大分夜も更けたなあと感じられる——と、霜夜の曉を詠んだ歌。

7 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

大空をはるかに望むと、月が美しい。あの月こそ、かつての日、自分が故郷にゐて眺めた奈良の春日、あの三笠山に出た月であらうか——と、つくづく月を眺めた哀れ深い懐郷の歌。

安倍仲麻呂

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも  
かたむねの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも  
かたむねの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも



彦根法師

わが庵は都の辰巳しかぞすむ世をうち山と人はいふなり  
あつたにまをさる地や  
まといふなふ子

8 わが庵は都の辰巳しかぞすむ世をうち山と人はいふなり

わしの住家は、都（京都）の東南にある。都に近いだけに、世を遁れる事の出来ない憂いところだと人はけなすが、わしはかやうに年久しう住んでゐるわい——との安住の地を得た喜びの歌。

9 花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

ぼんやりしてゐた間に、さかりを眺めようと楽しみにしてゐた花も何時の間にか色褪せてしまつた。ただ何となくわが身もさつらうつらしてゐる間に、花の姿を失つて年老いたことよ。

小野小町

花乃名（し）うはらわし  
たはらふわの身世ふらふ花  
見せしすふ







僧正遍照

あゝはるをせよと云ふ地  
あゝしよることのみを  
何れも先ナク

12 天津風雲の通ひ路吹きとちよ乙女のすがたしばしとどめん

天吹く風よ今天女が舞ひを終つて歸るであらうから、どうか雲を吹きよせて、その歸り路を塞いでくれ、美しい姿を今しばし止めて眺めてゐたいから——禁中五節の舞姫の美しさを詠んだ歌。

13 筑波根のみねより落つるみな川の戀ぞつもりて淵となりぬる

筑波山(常陸)の嶺からしたり落ちる僅かな水が、だんだん集つてみな川の川となり、末は深い淵となるやうに、わが戀も初めは、ほんのほのかなものであつたが、積り積つて淵のやうに深いものになつてしまつた。

陽成院

はるもはる乃かみよわおつる  
あゝあゝうは恋うはりまゝ  
かやしむなるまぬる



河原左大臣

しおくぬし乃ちりしあま  
れゆかすくす美されくち  
くまなられとふ

14 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

奥州の僧夫(しのぶ)郡から出るもち指りの機織の風れたやうに、わが心も亂れてしまつた。これは誰の爲か、みんな君故である。かつて思ひ亂れたことのない自分だけに、さうはつきり言ひ得る。

15 君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ

そなたに贈らうと思つて、野邊に出て若菜をつんでみると、まだ春も遅くて、若菜つむわが袖に液雪さへ降りかかつた——人に若菜を給へる日、丁度雪が降つて来たりしたのでかく贈る給うたものらしい。

光孝の天竺

まふみくさのけさあけくさ  
つれつむ香のさるさるふ  
あまをさし



中つゆこしつゆ

立ちわかれしなばの山に生ふるまつとしきかば今かへりこむ  
まよひにたふさるまを  
あまのこみ

16 立ちわかれいなばの山の山に生ふるまつとしきかば今かへりこむ

今自分は、みなと別れて因幡へ行くが、あのいなば山に生えてある松といふ樹の名のやうに、もし我を持ちたげびてると聞いたら、すぐにも歸つて来よう——因幡守となつて京をたつ時詠んだ別離の歌。

17 千早ふる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは

在原業平

この龍田川に紅葉の流れてゐる繪を見ると、流れる水を、から紅の絞り染めにしてあるが、こんな珍しいことは不思議な事の數々あつた神代にも聞いた事がない。全く不思議な繪だ。

千早ふる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは  
あふたふたしつゆをきなるあふた  
とたつたふた



藤原氏の御玉

春水乃えおる存ふよる

おろそ夢の

夢の

18 住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよぐらん

畫間戀人のところへ通ふのならば、人目をしのぶのも當然であらうが、夜、夢の中で通ふ路でさへ、人目をさける夢を見るのは、如何したものだらう——まこと沈寢なる戀歌。

19 難波濁みじかき蘆のふしの間もあはてこの世をすこしてよとや

難波濁に生えてゐる蘆の間は、きはめて短いのだが、その間のやうな短い時間でも、思ふ人に逢はずに空しくこの世を過せよとの御心中ですか。それはあんまり悲憤すぎる。

伊勢

下もも

ふ

し



元良親王

多しぬきそくはまふあけ

難波るるの然つてあまの

さう

20 わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はんとぞ思ふ

二人の秘密な態が露はれて、大事となつてから逢はれぬやうになつたので、心を苦しめ思ひ煩つてゐるが、悩んでばかりゐては生きてゐる甲斐もない。どうせ同じ事なら、命を捨てても逢はうと思つてゐる。

21 今來むといひしばかりに長月の有明の月をまち出でつるかな

今来ると、たつた一言いつたばかりに、それを信じて、この長月の末の長い夜を、今来るか今来るかと待ち侘びたが、約束の人は来ないで、待ちもしない明方の月が出た、随分待ち更かしたものだなあ。

素性法師

いふ来は

たのほきものありは月

しつてつる



文屋原

あきからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

22 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

山風が吹くと、すぐこんなに秋の草や木が萎み枯れてしまふから、山風のことをあらしといふのも成程、道理のあることだ。——想像たる景色を前にして、山風の風といふ理を感じた歌。



23 月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

秋の月を見てみると、いろいろな悲しみが胸に浮んで悲しい心持がする。世の人は誰かが秋の心とうたれてゐて、わが身ひとつりが寂しいのではないが——身に迫る秋の悲しさを詠んだ歌。

大江千里

月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど



菅家

此のまゝをぬるとも人あるに下りし  
くもこの紅葉の神  
の神

24 このたびはぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

この度の旅は、朱雀院のお供の旅で、取急いで出かけたので途中で神々に奉る幣も持つて参りませんでした。で、今この山の神に手向け奉る幣は、とりあへずこの美しい紅葉の錦を幣といたします。どうぞ神様のお心ませに幣として御覽下さい。

25 名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもかな

逢坂山の逢ふといふ字が、その名の通りであるなら、その逢坂山に生えてあるさねかづらを手にたぐるやうに、人に知られぬやうに私の方へ忍んで来る方法もないものだらうか。さうあつて歌しいものだ。

三條右大臣

名にしおはば逢坂山  
のさねかづら人に  
しられでくるよし  
もかな







源宗正朝臣

山をぬくも冬は静か  
あお今も人かえ草もぬ  
おきあつと

28 山里は冬ぞ淋しさまさりける人めも草もかれぬと思へば

山里は、四季を通じていつでも淋しいものだが、とりわけ冬になると淋しさが増す。草も枯れるし訪ねて来る人も絶えてしまふ。全く淋しいことだ——と、冬の景色の淋しさに作者の寂しい心持をよせた歌。

29 心あてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

若し菊を手折らうと思ふなら、ただ心で推し量つて折るより仕方があるまい。初霜が眞白に降つて、どれが白菊の花やら、さつぱり見分けがつかなくなつたから——と、如何にも大霜らしい。

凡河内躬恒

初霜の置きまどはせる白菊の花  
心あてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花



一生忠孝

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし

物と成

30 有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし

有明の月が、夜の明けるのも知らぬ氣に空にあるやうに、あの女もつれなく冷淡な態度をしてゐたので、すげなく別れて歸つたが、あれ以來、明け方ほどいやなものはない様になつてしまつた。

31 朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野の里にふれる白雪

吉野の里へ来て泊つた明け方、起き出して見ると外は眞白であつた。で、これは有明の月の光であらうと思つてゐたが、よくよく見ると、それは白雪が降り積つてゐるのであつた。

坂上忠則

朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野の里にふれる白雪

朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野の里にふれる白雪

朝ぼらけ



春道列樹

わあふ 登るふ 智の 考るふ  
あふ なる せえあ ぬりも  
ふあ介 遊

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

この山川にかけ渡した橋（しがらみ）がある。よく見ると、それは吹き散らされた紅葉が水の上に溜つて流れ出ることが出 来なくなつてゐるのだ。ああ、風が持つて来てかけたものだ。

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん

うらかな太陽の光、穏かで風もないかうした長閑な春の日に、 どうして花は、あのやうに落ちついた心もなく、あわただしく 散るのであらうか——春に酔ふ大官人のどかな心がしのばれ る。

紀友則

毛の 冬乃 妙々 春の 日  
けの 日乃 妙々 春の 日  
乃 妙々 春の 日



昔の松風

誰かよりの人よ

あつたよりの人よ

友よ

34 たれをかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

自分はひどく年をとつて、昔の友達も今は一人も生きてゐない。まあ誰を友として交つたらよからう。せめてあの高砂の松でも友にして語りたいが、あの松とても昔ながらの友ではない。

35 人はいさこころも知らずふるさとは花ぞ昔の香にほひける

なつかしい故郷のやうな思ひのする初瀬へ久し振りで来て見ると、この家の主人の心は變つたかどうか知らないが、ここに咲く梅の花だけは、昔ながらに匂つてゐる。

花ぞ昔の香にほひける

ふるさと

花ぞ昔の香にほひける

花ぞ昔の香にほひける



清原深養父

夏の夜はまた宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん  
ゆめをよそえとみればはくまの月や

36

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん

夏の夜は短い。まだ宵だと思つてゐるうちに、もう明けてしまつた。今まで見てゐた空の月も見えなくなつた。まだ西へ入つた筈もないが、一體どの雲の中へ姿を隠したのだらう。

37

白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

秋の野の、草葉の上一面にしき渡した白露が、秋風の吹くにつれて、ばらばらと光つて散る。その様はまるで、糸を通してない玉が、ばらばらとこぼれるやうに美しい。

文屋朝康

しづのふりたれもきこえ久  
秋野冬はけしめま東の如  
玉にちりける



右近

わとらるる身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな  
しるも人の命の

38 忘すらるる身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな

見捨てられたわが身のことには少しも思はないが、いつまでも  
變らないと神佛に誓を立てて約束した君が、神罰をお受けにな  
りはしまいかと思ふと、心から君の命が惜しまれてならない。

39 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど餘りてなどか人の戀しき

今の今まで胸の中に、そつと包み隠してゐたが、思ひあまつ  
て堪へられない程、あの人が戀しいのは、どうした事であらう  
か。自分ながら自分の心が疑はしい程である。

浅茅生

浅茅生をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな

しるも人の命の

くのかこひしき



平五盛

母了ふ本こと名しりし出ふ今子  
身の恋を物やおりふ中  
人乃さふすを

40 忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで

自分の戀は、誰にも気づかれないやうにと、そつと包み隠してゐるが、思ふ心は自然に顔かたちにもあらはれると見える。何かもの思ひでもしてゐるのかと、人が噂ねる體になつた。

41 戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

私が戀をしてゐるといふ噂が、早くも立つてしまつた。私は誰にも知られぬやうにと、こつそり心の中で戀し初めてゐたのに——戀の浮名の立ちやすいのを驚き嘆いた歌。

壬午冬忠見

心はそそ帯りわなな心未だ  
そらよのるまかてり 村長こに  
ありひるり



清原元輔

ちまふあすふつる涙の袖を  
しほらまつを海に流せぬ  
浪のあはれとは

42 契りきなかたみに袖をしほりつつ末の松山波こそさじとは

あの時あれ程強い約束をしたのに。互に涙にぬれた袖をしほりながら、あの末の松山を波が越すことのないやうに、二人の心も決して離れないと。だのに心変わりしたのは、あの約束を忘れたのか、よもや忘れはしまい。

43 あひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

逢はない前は、せめて逢つたら胸の苦しきもなくならうと聞えてゐたが、ああして逢つてみると一層思ひが増すばかりで、今の聞え苦しみに比べれば、逢はない昔は、こんなに物想ひをしなかつたのになと思ふ。

中納言教忠

くまのこゑをきくはしもの心より  
ふさぎをみたりし物を思は  
ずるが如し



中絶しては

あふことめあふこと  
たがひつるは  
あふことめあふこと  
あふことめあふこと

44 あふことの絶えてしなくばなかなか人も身をもうらみざらまし

戀しあふ二人に、若し逢ふといふことが絶對になかつたならば、却つて戀人をも、自分の身をも、恨むといふことはないであらうに、なまなか、逢ふといふことがあるので恨むことになるのだ。

45 あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな

私の事を可哀さうだと言つてくれるのはあなたばかり。そのあなたに見捨てられた上は、今更この私を、可哀さうだと言つてくれる程の人もあるまい。この身は空しく無れ死するであらう。つれないあなたよ。

徳徳

あしをこそく心帯ふ人  
ありかよは身は  
あふことめあふこと



る者好忠

ゆしつらひまななる人

ゆきとそりたりぬ

恋のくろくし

46 由良のとを渡る舟人かぢをたえ行く方も知らぬ戀の道かな

あの由良の水門を渡る舟人が楫を失つたやうに、自分を想ふ人に言ひ寄るたよりを失つて、私の戀は何をたよりとしてゆけばいいのやら、あてどもなく果敢ない戀となつてしまつた。

47 八重むぐらしげれる宿のさびしさに人こそ見えね秋は來にけり

草が、葎が、こんなに茂り茂つて荒れはてたこの家は、如何にも物寂しく、人の住んでゐる姿とて目につかぬが、それでも秋は相變らずやつて來た。——人生の有爲轉變、榮華の後の淋しさを詠んだ歌。

秋は來にけり

八重むぐらしげれる宿のさびしさに人こそ見えね

秋は來にけり

八重むぐらしげれる宿のさびしさに人こそ見えね







前原の歌

君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな  
かやうに君を想うてゐるといふ事だけでも知らせたいが、ど  
うしても打ちあけて君に言ふことが出来ない。ああ、君は知る  
まい、このやうに燃える想ひを——初めて戀を打ちあけた歌。

50 君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

まだ遠はぬうちには、君の爲ならわが命などはどうでもよいと  
思つてゐたが、さていよいよ逢つてみると、その惜しくなかつ  
た命さへ、愈に惜しくなつて、何時までも長らへて逢つてゐた  
いものだと思はれて来た。

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを

かやうに君を想うてゐるといふ事だけでも知らせたいが、ど  
うしても打ちあけて君に言ふことが出来ない。ああ、君は知る  
まい、このやうに燃える想ひを——初めて戀を打ちあけた歌。

前原の歌

君がためをしからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな  
かやうに君を想うてゐるといふ事だけでも知らせたいが、ど  
うしても打ちあけて君に言ふことが出来ない。ああ、君は知る  
まい、このやうに燃える想ひを——初めて戀を打ちあけた歌。



あはれを信朝に

あはれを信朝に

あはれを信朝に

あはれを信朝に

52 あげぬれば暮るるものとは知りながら猶うらめしき朝ぼらけかな

夜があげれば、やがて又、日が暮れて夜になる。そして夜になれば、又逢へることを知つてゐながら、それでも矢張り、逢へたその夜は、別れぎはの夜あけがうらめしく思はれる。

53 なげきつつひとりぬる夜の明くる間は如何に久しき物とかは知る

あなたは私の門をあけるのが遅いと、お怒りになるが、毎夜歌きながら獨り寝をして、今か今かと夜の明けるのを待つのは如何に長く待ち遠いものであるか、お解りなんですか。

あはれを信朝に

あはれを信朝に

あはれを信朝に

あはれを信朝に



後同三可母

わすれじの行末までは難けれど今日をかぎりの命ともがな  
命と母

54 わすれじの行末までは難けれど今日をかぎりの命ともがな

いつまでも、末長く忘れまいとの契りは、うれしくありがたく存じますが、それを守ることはなかなかのこと、いつそ今のうれしいお言葉を想ひ出し、今日限りの命として死んでしまひたい。

55 瀧の音は絶えて久しくなりぬれどなこそながれて猶聞えけれ

嵯峨上皇が大覚寺においでになる時御遣らせになり御覽になつた瀧の水はかれて、その瀧の音が絶えてからもうかなり久しくはなるが、評判だけは、矢張昔も今も變らず世に聞えてゐる。

大勢

あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ  
あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ  
あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ  
あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ  
あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ  
あまのりりぬれどなこそながれて猶聞えけれ



和泉式部

あきらつて寝るこの世のせうけり  
思ひ出さるゝ一はむらあふ  
半ののれ

56

あらざらむこの世の外ほかの想おもひ出でに今いま一度いちどの逢あふこともがな

私は今、病が重い。もう長くはこの世にゐられないだらうと思ふと、せめては来世の思ひ出になるやうに、もう一度君にお逢ひする事が出来たらと思つてゐます——今一度と、切ない病床からの熱い戀情。

57

廻まりあひて見みしやそれともわかぬ間まに雲くもがくれにし夜半よなかの月つきかな

久しぶりで、思ひがけなくめぐり逢つた友、たしかその方かどうか明らかに見分けもつかないうちに、雲にかくれた今夜の月のやうに、すつと姿が見えなくなつてしまつた。ああ名残惜しいこと。

素式部

あきらまふこの世のせうけり  
思ひ出さるゝ一はむらあふ  
半ののれ



大貳拾伍

あつち山のかげを  
風が吹くも  
やとよの

58 ありま山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

あなたこそ却つて私をよそよそしくして、訪ねて来ても下さらないで、私の心を慰ふなんてもつての他ですよ。私があるを忘れることなんて、どうしてありませうか。

59 やすらはで寝なましものを小夜更けて傾くまでの月を見しかな

初めからおいでにならぬと知つたならば、かうも待たずに寝んだものを、お言葉を信じて待つてゐるうちに、とうとう夜が更けて、西の山の端に傾かうとするあけ方の月をひとりで見ました。

たふれ

あつち山のかげを  
風が吹くも  
やとよの



小式部卿

大江山の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立  
れもすたかこゝろんんあ  
乃橋

60 大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

丹後の國は、大江山といふけはしい山や、生野などといふ  
\*とした野の道を進んで、遠い道中ですから、また天の橋立へ  
は行つてみません—にかけて、まだ母からの書面は参りませ  
んの意。

61 いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重にほひぬるかな

その昔、奈良の都で美しく咲いた八重櫻も、再び時を得て、  
今日この九重の御所で、一層美しい色香を見せて、咲きにほつ  
てゐることよ—「一條院の御時、奈良の八重櫻を人の参りけ  
るを」

伊弉の太輔

いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重にほひぬるかな  
心遊るこゝろ今も昔も九重  
ほひぬるかな



清少卿

松をくわして冬をくわす

くわすくわすくわすくわす

くわすくわすくわすくわす

62 夜をこめてとりのそらねをはかるともよに逢坂の關はゆるさじ

昔支那には、鹿の鳴きまねに偽られて、函谷關を開けた齊人があるといふ。しかし狐とあなたと逢坂の關の關守は、そんな偽ことに欺かれて、よもや戸を開いたりはしませんよ。

63 今はただ思ひたえなんとばかりを人傳ならでいふよしもがな

逢ふことも出来なくなつた。今はもう思ひきる他はない。しかしこの上の願ひは、ただ一言、悲しいけれど思ひきりませうと、人の傳言でなく直接會つて話す折もあればよいが、と願つてゐる。

たふす大夫の歌

今宵は思ひたえなんとばかり

を人傳ならでいふよしもがな

たふす大夫の歌



松中油くわら

あまのこがきまうまはたふりまはたふり  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
はたふりまはたふり

64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれ渡る瀬々の網代木

宇治川の上に立ちこめた朝霧も、ほのぼのと夜の明けゆくにつれて次第に舞れて、そのとぎれた霧の絶え間から、川の瀬毎に立つてゐる網代の樺杖が見え初めて来た。何とも言へないよ  
い眺めである。

65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなん名こそ惜しけれ

つれない人を恨みめぐんで、恋しみの涙に袖は乾くひまもない。私の袖はこのため朽ち果てようとする。その上、世間からは浮名をたてられ、私の名まで朽ちてしまふのが口惜しい。

相松

うらうらうらうらうらうらうらうら  
あまのこがきまうまはたふりまはたふり  
うらうらうらうらうらうらうらうら



前大徳正行号

り寝るまゝのあはれ  
山桜をよおす  
おとど

66 もろ共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし

この奥山で、思ひもかけず花の咲いてゐるのを見ると、ほん  
とに懐しい。わしがおまへを懐しく想ふやうに、お前も亦、私  
を懐しく想つてくれ、山桜よ！ お前より外には、私の心持を  
知るものは誰一人としてないのだから。

67 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ

枕になさいと言つては下さいますが、この短い春の夜の、し  
かも夢のたはむれ事に、あなたのお話を手枕にして、立ち  
甲斐のない浮名のとられることは口惜しいことに思ひます。

周防守内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ



三條院

有るもあえあそこの世ふ  
なうらつを恋するつ羽葉  
あまの月水

68

心にもあらでうき世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな

かやうに不幸がつづき、その上病氣の爲に心も暗れぬ、長くはこの世に生き長らへられぬであらうが、若し生き長らへたら定めし今、禁中で見ると今夜のこの月を戀しく思ふことがあるであらう——との御意。

69

あらし吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり

嵐に吹き散らされた三室の山（大和國高市郡）の紅葉が、はらはらと川水に舞ひこめば、そのままが錦の美々しさで、龍田の川を流れてゆく。美しい秋ではある。

龍田法師

阿らし吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり  
あらし吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり  
あらし吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり



良暹法師

さびしき宿を立ち出でてながむればいつくも同じ秋の夕ぐれ  
ありてはまきあはれはるるおろそ  
— 秋乃夕ぐれ

70 さびしさに宿を立ち出でてながむればいつくも同じ秋の夕ぐれ

あまりのもの淋しさに堪へかねて、家を出て、あちらこちら眺めてみたが、矢張りこゝも同じやうに蕭條たる秋景色である。なんとさびしさの満ちた夕暮であることよ。

71 夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまる屋に秋風ぞふく

夕暮になれば、秋の風が、門前の田に美しく茂つてゐる稻の葉にそよそよと訪れて、聲で弄いた田舎家の中まで、その秋風がさわめてゆく——一幅の暈繪を想はせる秋風譜。

大弐しづ経信

ゆふふれは門田の如くありては  
はまきてありては  
秋風乃吹







源後頼朝五

うのあふへる人 辛初瀬の

山五峰 によはるうとそ

ひみらぬものを

74 うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを

私につらく當つてゐた人の心が、和らぐやうにと、初瀬の観音に願をかけたのに、反つて初瀬の山おろしのやうに激しくあたるやうになつた、まさか、そんな祈り方はしなかつたのに。

75 契りおきさせもが露を命にてあはれ今年の秋も去ぬめり

お約束になつたお言葉を、命にかけてあてにして待つてゐたのに、ああ今年の秋もその甲斐もなく、空しくすぎてゆくことであらう——愛子光覺が、維摩會の講師になりたいと願つてゐる心をあはれんで。

前原基俊

契りおきさせもが露を命にてあはれ今年の秋も去ぬめり

のらまそ あはれ今年の

秋も去ぬめり



法住寺大之斎大政大臣

もつと原くまふ山崎見れし

いづりつるのや丹山やうま

おまゝしりば

76 わだの原漕ぎ出でて見れば久方の雲井にまがふ沖つ白浪

海上はるかに漕ぎだしてみると、海がはてもなく廣々と續いて、大空と一つになつてゐる沖の白浪も雲のやうに見える——水天一碧、これ大、これ海の差別のない壯大な大海原。

77 瀬を早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあはむと思ふ

流れの早い瀧川の水が、岩に撞きとめられて兩方へ分れて流れるが、又末は相合して流れる。そのやうに私の戀も、今は他人の爲に一旦別れてはゐるが、末はきつとより逢はうと思ふ。

山宗法印

せを早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあはむと思ふ

川の早きを早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあはむと思ふ

おまゝしりば



源三昌

あも地崎ふらふら乃  
なまじく静ふく相移るるぬ  
淡る乃関守

78 淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寝覚めぬ須磨の關守

ただ一夜の旅寝にも、海を隔てて淡路島へ通ふ千鳥の鳴く聲が、あはれ深く心にしみる、ましてこの須磨の關を守つてゐる番人は、幾夜も幾夜もその聲に、さみしい寝ざめをすることであらう。

79 秋風になびく雲の絶え間より洩れ出づる月の影のさやけさ

秋風が吹いてくると、棚引てゐる雲が、とぎれとぎれになるが、その雲の隙間から洩れ出た月の光の、はつきり明かなことよ。實に鮮やかな月の光である。

左京大夫源三昌

秋風なびく雲の絶え間より洩れ出づる月の影のさやけさ  
まよありまじく相移るる月の影の  
なまじく静ふく相移るるぬ



待賢門院権川

不ぞとらむしをるるえし

星移たりと云ふまじきもの

物をこころにわたり

80 ながからむ心も知らず黒髪くろかみの亂みだれて今朝けさは物ものをこそ思おもへ

末長く心變りはせぬやうにと、互ひに言ひ交しましたが、男の心はどういふものか解りませぬ故、起きて別れたその後ではこの髪の亂れてゐるやうに、今朝の私は心も亂れてゐる。

81 ほととぎす鳴なきつる方かたを眺ながむればただ有明あけみの月つきぞ残のこれる

ほととぎすが珍らしく鳴いたので、すぐ空を仰いで聲のした方を眺めたが、今鳴いたばかりのほととぎすの姿は何處にも見えなくて、ただ有明の月だけが、白く晴の空に残つてゐる。

後待賢門院権川

ほととぎす鳴きつる方を眺むれば

ただ有明の月ぞ残れる

待賢門院



是因法師

ありしは是れ母命にあふ  
物色うらふめあはれは涙  
なまあはれも

82 思ひわびさては命のあるものを憂きに堪へぬは涙なりけり

ながい間、戀人のつれないのを歌いて、消え入るやうな思ひをしたが、それでも命だけは長らへてゐる。だのに、涙ばかりは堪へられないとみえて、今も乾く間もなく流れ落ちてゐる。

83

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる

世の中には、憂さ辛さを避ける道もない。せめて山の奥にでも隠れようとして一途に思ひ込んでわけ入つてみたが、こんな山奥にも鹿が、ああ鹿が、ものかない鹿で鳴いてゐる。

皇太后宮大夫修成

世中よ道こそなけれ思ひ入る  
山乃木をなれし  
なまあはれも



前原清輔の

静しくかたよきつらや

ふみのそきくくうみしるん

せうしんもくひ

84 ながらへば又此の頃やしのはれむ憂しと見し世ぞ今は戀しき

以前に、つらい世の中だと思つて暮らした時も、今になつて  
顧みれば喜はしく思はれる。かうして今つらい世だと思つて  
るが、まだまだ生き長らへてゐたらば、後には今日のつらいこ  
とも懐しく思はれることであらう。

85 夜もすがら物思ふ頃は明けやらで闇のひまさへつれなかりけり

つれない人と思ひ恨んで、終夜ものおもひに沈んでゐると、  
少しも眠れないので、いつそ早く夜があげてくれればと夜明け  
を待つても、更に明ける機子もなく、闇の板戸の隙間も少しも  
白んで来ない。

後世思ふ

ねりもくく物おりのつら

あつたつたつたつたつたつた

つらつたつたつた



西行法師

なげけとて月やは物を思はするかこち顔なる我涙かな  
そめくるこのころの初めは  
あつた

86 なげけとて月やは物を思はするかこち顔なる我涙かな

人々に物思ひを強ひるやうに、大空の月は輝いてゐるのだらうか。いや、自分の心に物思ひがあると、空を見てさへ悲しくなつて、月のために歎くものやうに、かこつけがましく、こんなにも涙がこぼれて来るのだ。

87 村雨の露もまだ干ぬまきの葉に蒞立ちのぼる秋の夕暮

ひとしきり降つて往つた村雨に、濡れた楓の葉の露もまだ乾かないうちに、もうその邊には、露がほの白く立ち上つて、秋の夕暮の景色はさびしいことである。

寂蓮法師

あつたのころの秋の夕暮  
あつたのころの秋の夕暮  
あつたのころの秋の夕暮  
あつたのころの秋の夕暮



室町幕府の御用

新波江のあ 子あふ孫の

うらよめをいふ城に

あはれ

88 難波江の重のかりねの一夜故身をつくしてや戀ひわたるべき

難波あたりで、旅の假寐にたつた一度逢つたばかりなのに、命のある限り、哀しい思ひを抱いて、離れ無れて暮さねばならないことかなあ。たつた一度の契りなのに忘れられさうもない。

89 玉の緒と絶えなは絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

わが命よ、絶えるなら早く絶えた方がよい。かうしてこの世生き長らへてみると、遂には人目を忍ぶ心が弱り、つつじ思ひが世間に知れて、浮名を流すやうになるかも知れないから。

式子内親王

あふれをよたをなはしん

うらよめをいふ城に

あはれ



散高門院大輔

見せばやな雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣片しき一人かも寝む

見せばやな雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣片しき一人かも寝む

いつもの海の水に濡れてある松島の雄島の漁夫の袖でさへ色が變らないのに、自分の袖は苦しい戀の涙で、こんなに色が染つてしまった。この色の變つた袖を、是非あのつれない人に見せてあげたいものだ。

91 きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣片しき一人かも寝む

今夜のやうな、きりぎりすが鳴いて寒い霜の降る晩に、つめたさうな席の上に、帯も解かず、着物を片方敷いてひとり寝をするものかな。さても怪しいことである。

後高橋掃部大輔

見せばやな雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣片しき一人かも寝む

見せばやな雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず



二應院御政

秋のそよ風はひらひらと吹く

舟名はくまのふしやう

まのり

92 わが袖は沙干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

戀人のつれなさをひとり忍んで、戀しんでゐる女の袖は、丁度、沙干の時も現れない沖の石のやうに、人には少しも知られないが、涙で乾く間とはなない。

93

世の中は常にもがもな渚ごとく海士の小舟の綱手かなしも

渚邊を滑いでゐるあの海士の小舟の、綱手をひく櫂子は、まことに何とも言へない面白い景色であるが、永久不變に長く生きてゐられて、度々見に来られるといいたがな。

鎌倉右大臣

そよ風はひらひらと吹く

舟名はくまのふしやう

まのり



系隊歌經

羨ぐ一暇も女すもの秋の  
七つよふなき多るをさう  
路をんうらふる里

みよし野の山の秋風小夜更けてふるさと寒く衣うつなり

吉野の山の秋風が、さやさやと寂しく吹いて、夜も更け、あ  
たりも静かになつたが、この彌都であつた吉野の里人の夜寒を  
わびて衣を打つ音が、身にしみじみと聞えて来る。

おほけなくうき世の民に蔽ふかな我が立つ袖に墨染の袖

私は、天台宗の本山、比叡山延暦寺に住んで、この狭い墨染  
の袖で世の人たちを蔽つて、多くの人の安全を祈禱してゐるの  
であるが、法徳のつたない愚僧の身ゆゑ、この重任にたへかね  
ることである。

前大僧正慈圓

おほけなくうき世の民に蔽ふかな我が立つ袖に墨染の袖  
朽本ふらふワらふふらふらふ  
墨を染るうき世



八道前大坂大坂

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

98

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

嵐が花を舞つて吹きちらす庭は、あたかも雪が降つてゐるかのやうに見えるが、ふるものはその實、あの花の雪ではなく、段々古びてゆく、年老いてゆくわが身である。

97

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻鹽の身もこがれつつ

待つても来ない人を、今来るか今来るとか待つので波路の風の松帆の浦の夕風のころ、海士の焼く鹽の、火に焦るるやうに、わが身も焦り無れて熱い想ひをするのが苦しいことである。

権中卿

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻鹽の身もこがれつつ

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻鹽の身もこがれつつ

来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻鹽の身もこがれつつ



後二位之孫隆

風そよぐ櫓の小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける  
多き一はよみなる

98 風そよぐ櫓の小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける

櫓の葉が、涼しい風にそよそよとゆれる夕暮の景氣を見ていると、もうすつかり秋が来たやうな氣がする。が、かうして名越の御殿をしてゐるのをみると、まだ夏である。

99 人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は

多くの人を憎しく思ふものもあれば、恨めしく思ふものもある。泉室の威光が衰へて、天下の政治は心にまかせぬ事ばかりで、計ふも甲斐ないことだが、いろいろこの世のことを心配してゐる——大御心の中を拜察して恐懼に堪へない思ひがする。

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は  
あなまきむ世をなほふ  
了物おしあは



順徳院

百教や古き軒端のしよにも猶あまひある昔なりけり  
 七のふりそんたのよあ  
 百教や古き軒端のしよにも猶あまひある昔なりけり  
 七のふりそんたのよあ

百教や古き軒端のしよにも猶あまひある昔なりけり

内裏の御殿の古くなつて、軒にはしのよ草が生えるやうにな  
 り、奥の裏へた世であるから、その音が、思つても思ひつく  
 せない種はしいことである——との御意で、後鳥羽上皇の御  
 製と併せ拜讀すると、更に感涙深く恐れ多いきはみである。

昭和十一年二月十五日印刷  
 昭和十一年二月二十日發行

定價金卅錢



編輯者 株式會社 新文館  
 代表者 大葉久治  
 東京市日本橋區室町四丁目五番地  
 印刷者 大橋光吉  
 東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 共同印刷株式會社

發行所 株式會社 新文館  
 東京市日本橋區室町四丁目  
 振替東京二八〇番

關西專賣 株式會社 大阪寶文館  
 大阪市西區阿波彌通四丁目  
 振替大阪四三番



終